平城遷都１３００年祭記念

平成二十一年度秋季特別展

（第二十七回平城京展）

出土品に見る　奈良のやきものと暮らし

例　言

1　この冊子は、平成 21 年 11 月２日～平成 21 年 12 月 25 日まで奈良市埋蔵文化財調査センターで開催する、平城遷都 1300 年祭記念　平成 21 年度秋季特別展（第 27 回平城京展）「出土品に見る　奈良のやきものと暮らし」の解説パンフレットです。

2　掲載写真の撮影は、秋山成人が行いました。（表紙・裏表紙をのぞく）

3　本書の執筆は、森下惠介・池田富貴子が担当しました。

4　写真の番号は、巻末の展示品目録の番号に対応しています。

5　本書の編集・レイアウトは埋蔵文化財調査センター・奈良市教育委員会文化財課職員の協力のもとに、池田富貴子が行いました。

調理の器

やきものの始まり

粘土に熱を加えて変成させる土器の焼成は人類が最初に応用した化学変化です。土器の使用により初めて水を使った「煮る」「炊く」「ゆでる」といった調理が可能になり、それまで食べられなかったものも土器を使った煮炊きによって食べられるようになりました。ドングリなどの堅果類や野生イモなど、土器の使用によって可能になった植物食への依存は定住生活をも開始させます。奈良県内では大和高原地域に縄文時代早期の遺跡が見られ、杣ノ川イモタ遺跡出土の深鉢形土器もこうした縄文時代早期の煮炊きの器で、およそ一万年前、奈良市内最古の土器です。

1　縄文土器深鉢　杣ノ川イモタ遺跡
縄文時代早期（約 10000 年前）

煮炊具の変遷

広口の弥生時代の甕、古墳時代の土師器甕、奈良時代の土師器甕、中世以降の鉄釜形の土師器羽釜。いずれもその時代ごとの煮炊きの道具の主役です。弥生土器も土師器も焼成方法は縄文土器と基本的には変わりません。600 ～ 800 度の低火度で焼かれ、粘土中の鉄分が大気中の酸素に触れて酸化した赤っぽい色をした素焼の土器です。こうした軟質赤焼き土器は米、麦、豆など穀物調理に不可欠で、底部の丸底化は炉から竈への変化もうかがわせています。

2　弥生土器甕　ゼニヤクボ遺跡
弥生時代中期（紀元前２～前１世紀）

3　土師器甕　菅原東遺跡　古墳時代前期（４世紀）

4　土師器甕　平城京東市跡　奈良時代（８世紀）

5　中近世の羽釜　中近世奈良（椿井町・北室町）遺跡
平安時代後期（12 世紀前半）・江戸時代（17 世紀半ば）

江戸時代になると、素焼きの炊飯具は鉄釜や鉄鍋にその座を譲りますが、煎ったり、あぶったり、焼いたりする炮烙は素焼きの土器で、台所の必需品でした。また、味噌、醤油、酒などによる味付けが多彩になり、陶器製の土鍋も流行し、陶器の行平鍋で炊く粥は特にうまいとされました。奈良では茶粥などを炊いたかもしれません。

6　炮烙・行平鍋・土鍋　中近世奈良遺跡各地
江戸時代（17 世紀後半～ 19 世紀前半）

食品類をすり砕いたり、こねる鉢は古墳時代に須恵器のものが現れ、鎌倉時代後期には須恵器の系譜をひく焼き締め陶器の鉢におろし目と片口のついた擂り鉢が誕生します。おろし目は時代とともに増えていきます。団子や麺類、練りもの 、和えものなど、こね鉢や擂り鉢は食生活の多彩化をものがたる調理具です。

7　須恵器鉢・瓦質土器擂り鉢・陶器鉢・片口鉢・擂り鉢
奈良市内各地　平安時代後期～江戸時代
（11 世紀後半～ 19 世紀前半）

たくわえの器

ものをたくわえる壺

8　弥生土器壺　ゼニヤクボ遺跡
弥生時代中期（紀元前２～前１世紀）

弥生時代に稲作が伝わり、食料生産が行われるようになると、ものを貯える壺が現れます。壺の出現は弥生時代の農耕の象徴ともいえます。大きく口が開く広口壺（ひろくちつぼ）、長い頸の長頸壺（ながくびつぼ）など貯蔵するものや内容物によって使い分けたとみられ、食用の米や稲籾を貯えたと思わせます。水・酒など液体の貯蔵、運搬も壺の重要な用途です。

9　弥生土器壺　大森遺跡
弥生時代後期（１～２世紀）

須恵器の登場

古墳時代中期、５世紀前半に韓国から伝来した技術で窯を使い 1000 度以上の高温で焼かれた灰色の硬質土器を須恵器（すえき）と呼んでいます。窯を閉じて大気中の酸素の供給を押さえ、青灰色に焼きあげています。粘土紐を巻き上げた後に轆轤（ろくろ）を使う成形技法、当て具と叩き板を使った成形技法などが特徴的で、須恵器以後、焼き物は専業工人によってつくられるようになります。須恵器の壺や大型の甕は貯蔵用で、煮沸用の土師器とはそれぞれの特質を生かし、使い分けされます。

10　須恵器甕　古市城山遺跡
古墳時代（５～６世紀）

11　須恵器貯蔵器　平城京跡各地
奈良時代（８世紀）

須恵器から焼き締め陶器へ

平安時代になると須恵器は壺、甕、鉢などの貯蔵具・調理具に残り、一部は岡山県の備前焼などの焼き締め陶器に発展していきます。備前では高火度の酸化焔（さんかえん）焼成で備前焼特有の赤黒い硬質の焼き締め陶器を作り出しました。桶（おけ）や樽（たる）などの木製貯蔵具が発達するまで、大甕は擂り鉢、壺とともに備前焼の主力生産品の一つで、中世の奈良の町の油屋、酒屋、染物屋などで多く使われました。

12　備前焼甕　中近世奈良（椿井町）遺跡
室町時代後期（16 世紀）

食事の器

供膳の器

弥生時代に現れる高杯（たかつき）は台脚のついた器です。稲作技術とともに大陸から伝わった器形で、鉢とともに特別な食事、祭事用と考えられます。

13　弥生土器鉢　柏木遺跡
弥生土器高杯　ゼニヤクボ遺跡
弥生時代中期（紀元前２～前１世紀）

古墳時代の須恵器の蓋杯（ふたつき）は個人用の小型飲食器で、その形は韓国から伝えられました。椀形や皿形のないこの時代の食器の主役とされますが、須恵器高杯とともに古墳の副葬品に多用しており、葬祭用の供献具としての性格が強く感じられます。

14　須恵器蓋杯　東紀寺遺跡
古墳時代中期（５世紀）

食膳の成立

貴族の食膳

庶民の食膳

15　須恵器と土師器の食膳セット　平城京跡各地　奈良時代（８世紀）

飛鳥時代、７世紀後半に須恵器の杯は大きく変化します。金属器を模倣したとみられる宝珠形（ほうじゅ）のつまみのついた蓋（ふた）と平底あるいは高台のつく杯（つき）の組み合わせが一般化し、須恵器と土師器の組み合わせによる杯・皿・椀からなる画一化した食膳具が構成されていきます。個人ごとに飯、菜、汁を別の器に盛りつけた膳、箸（はし）を使って食べるといった食事法が宮中の共同飲食（宴会）で採用され、食器や食事法まで唐風に改められたのがこの時代の特徴です。奈良時代、上流の貴族層は金属器や漆器も食器として用いていたとみられ、庶民の日常食器には木椀や曲物も使われていました。須恵器と土師器の組み合わせからなる多種多様の土器の食器は平城京内からも多く出土しますが、こうした土器の食器は宮や官衙（かんが）での儀式用の食器であった可能性もあります。

規格性をもった食器

奈良時代の土器の食器には同じ形の器でも大きさの違うものがあり、大きさごとに規格性をもっています。また、土師器と須恵器という焼き物の違いを越えて大きさや形が一致し、互換性をもつものがあり、土器生産に規制があったことをものがたっています。この時代、衣服・装身具の色や材質の違いで身分を表示したのと同様に、平城宮で給される食膳ではこうした食器の組み合わせや大きさに身分が反映され、使い分けされたと考えられています。

16　須恵器杯　大・中・小　平城京跡各地　奈良時代（８世紀）

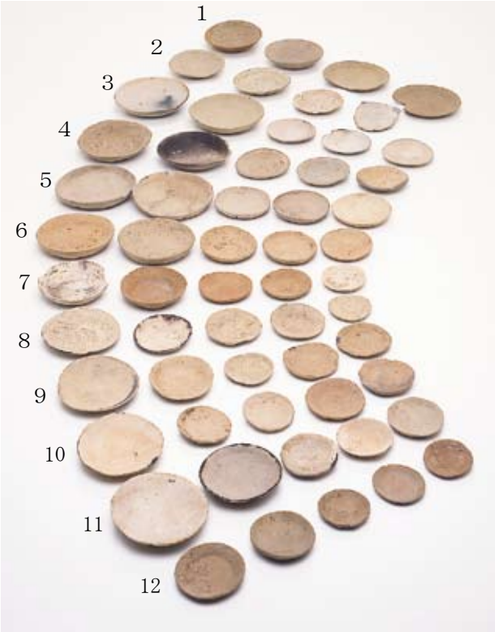
黒い椀

奈良時代の食器のうち、広く平らな底部を持ち、やや深いものを杯（つき）と呼んでいます。米飯を盛った食器と考えられ、平底のものと高台のついたものがあります。８世紀の終わり頃になると、土師器杯の一部に内面に炭素粒（煤）を吸着させ、水漏れを防ぐ工夫がなされたものが現れ、これを黒色土器（Ａ類）と呼んでいます。平安時代の 10 世紀の中頃になると器の内外両面とも黒色処理したもの（Ｂ類）が現れ、高台のついた杯は中国陶磁器を模した椀形へと変化していきます。さらに 11 世紀には瓦器（がき）と呼ばれる灰色軟質の土器を黒色処理したものが現れ、室町時代前期の 14 世紀まで大和地方では規格化した椀と小皿が量産されます。使い捨てであったらしく完全な形のものが奈良の町から大量に出土します。この時期の土師器皿とともに神事や仏事に関わって使用される一度きりの食器、儀式用の食器とみられ、黒色処理は黒漆塗の椀を模したとも考えられます。

17　土師器杯・黒色土器Ａ類杯・黒色土器Ａ類椀・黒色土器Ｂ類椀・瓦器椀
奈良市内各地　奈良時代～室町時代前期（８世紀～ 14 世紀）

杯から皿へ

奈良時代の土師器の杯は平安時代になると序々に浅くなり、皿との区別が難しくなります。平安時代後期の11世紀には杯と呼べるような器形はなくなり、土師器は皿だけになります。平安時代後期から鎌倉時代にかけて焼き物の食器の組み合わせは瓦器椀と土師器皿だけになり、皿の大きさは大・小の2種類のみで、大きさの差も時代が進むにつれて小さくなっていきます。こうした中世の土師器皿は「かわらけ」とも呼ばれています。瓦器椀とともに儀式用の食器とみられ、江戸時代まで儀式用の酒杯、灯明皿として残ります。



18　土師器杯・皿　奈良市内各地
平安時代～江戸時代(9世紀～19世紀)

神仏への饗応

実用の土器を模して、小さくつくったミニチュア土器は、神をもてなす道具、祭祀具と考えられます。ただ、須恵器の壺や平瓶のミニチュアは硯の水滴など実用品とも見られ、ていねいに小さく作られたさまざまな土器類は「ひな道具」の原形を連想させます。

19　ミニチュア土器　平城京跡各地　奈良時代(８世紀)

20　神酒徳利・仏飯器・華瓶・香炉・線香筒
中近世奈良遺跡各地　江戸時代
(17世紀初・19世紀前半)

21　ごんぱい　中近世奈良（北室町・高天町）遺跡
室町時代(14世紀末～15世紀初)・江戸時代(19世紀前半)

江戸時代の陶磁器の仏飯器、華瓶、香炉、線香筒、神酒徳利などは家ごとの仏壇や神棚の定着をものがたっており、華瓶、香炉などの形は青銅製の仏具の形を模しています。

春日大社の神前の御供に使用する独特の脚台付の皿は「ごんぱい（高杯＝こうはい)」と呼ばれ、同じ形のものが現在も春日大社で使われています。

茶の器

茶器のはじまり

我が国の喫茶の風習は奈良時代に中国から伝わったとされ、茶は当初、薬品として扱われました。この時期の茶は葉茶を固めたものをあぶり、薬研で引いて粉にしたものを煮出す方法で飲まれ、８世紀末ごろに出現する緑釉陶器の羽釜と椀、それに火舎のセットは茶道具である可能性が考えられています。緑釉陶器の椀は中国製の青磁碗を模倣してつくられており、唐文化への憧れが感じられます。

22　緑釉陶器　羽釜・椀　大安寺旧境内・平城京跡各地
奈良時代末～平安時代初（８世紀末～９世紀初）

喫茶の隆盛

中国宋代の喫茶法は、葉茶を粉にしたものを直接茶碗にいれ、そこへ湯を入れてかき混ぜる方法に変化します。この抹茶を飲む方法を日本に持ち込み、広げたのは、『喫茶養生記』を著した栄西に代表される禅宗の僧たちです。抹茶専用の茶碗「天目碗」の名も中国浙江省の天目山の名に因むもので、建窯（福建省）の黒釉碗は特に「建盞」と呼ばれ尊ばれました。こうした「唐物」を模した瀬戸や肥前の陶器碗は喫茶の流行をよくものがたっています。

23　輸入磁器　天目碗（建窯）
西大寺旧境内　中国　宋～元代（13世紀）

24　国産陶磁器の茶碗　中近世奈良遺跡各地
江戸時代（17世紀前半～18世紀）

抹茶から煎茶へ

室町時代の終わり頃には抹茶の喫茶法は「茶の湯」として確立されていきますが、江戸時代には新たに葉茶を湯に浸して飲む、煎茶が中国から伝わり、小振りの煎茶碗が簡単に飲める煎茶の普及を示しています。急須は本来、湯沸かしのための道具で、煎茶を入れるようになるのは幕末以降と見られています。湯沸かし用の土瓶など江戸時代に茶が日常の飲み物として広く庶民の間にも広がり、くつろぎの飲み物となっていったことを、出土する焼き物がものがたっています。

25　急須と煎茶碗　中近世奈良（高天町）遺跡
江戸時代（19 世紀前半）

26　土瓶と湯飲み碗　中近世奈良遺跡各地
江戸時代（19 世紀前半）

茶壺

茶壺は、葉茶を保管する壺です。茶壺も当初は唐物が使われましたが、需要が増えるにつれて国産陶器でも作られるようになりました。「御用御茶師」「南都」の文字が書かれたものは、頸部のない、鉢のような形をしています。茶道で使う茶壺ではなく、茶を販売する際に使った容器ではないかと思われます。

27　茶壺　中近世奈良（高天町）遺跡
江戸時代（19 世紀前半）

湯を沸かす

風炉は、茶道では夏期の間、湯を沸かす道具として使われるもので、奈良は焼き物の土風炉の産地として有名でした。土師質のものと瓦質のものがあります。

28　瓦質風炉　室町時代（15 世紀前半）
土風炉　　江戸時代（18 世紀前半）
中近世奈良（阿字万字町）遺跡

酒の器

酒は神祭りの際の飲み物で、酔いによって非日常的状態を招くことに飲酒の目的があり、もともとは日常的な飲料ではなかったと考えられます。古墳時代の須恵器𤮋、鈴付壺などは、酒を入れ神や死者を祭る祭祀具とみられます。𤮋は小円孔に竹管を差し込んで使う注口土器、下部に玉の入った鈴台の付く鈴付壺は酒を入れ、音を出して神霊や霊魂を招く器とみられます。神の降臨を願うとき、死者を送るときなど祈りの場には酒は不可欠のものでした。

29　須恵器𤮋　東紀寺遺跡　古墳時代中期（５世紀）
須恵器鈴付壺　杏遺跡　古墳時代後期（６世紀）

奈良時代、平城宮で行われる宴会には祭祀的要素もあって、酒は不可欠でした。「造酒司」という役所で、酒は大甕で大量に造られ、須恵器の広口中型の甕や長頸の壺に小分けされ宴席に配されたと見られます。

30　須恵器広口甕、長頸壺、注口土器　平城京跡各地
奈良時代（８世紀～９世紀後半）

江戸時代になると酒は酒屋から簡単に手に入るようになり、小売は樽や貧乏徳利と呼ばれる通い徳利で行われ、酒は日常的に飲まれるようになっていきました。奈良の酒は室町時代から名酒として知られ、その名声は伊丹、灘などが台頭する元禄年間まで続きました。猿沢池に沈む霰をみて発明したという「あられ酒」は奈良の名産で、現在も造り続けられています。

31　備前焼徳利、陶器徳利、磁器徳利、酒杯、猪口
あられ酒瓶　　中近世奈良遺跡各地・正歴寺旧境内
江戸時代～近代（17 世紀前半～ 20 世紀初）

平瓶の形

扁平な胴部の一方、偏った位置に口をもつ須恵器の平瓶は平城京でも比較的多く出土する容器です。その形は江戸時代の溲瓶や中国で「虎子」と呼ばれた古代の溲瓶とも似ています。平瓶にはさまざまな大きさのものがあり、井戸から出土している大型のものは、頸部に縄を巻いて、釣瓶として使いました。鳥鈕蓋がつき、全体の形をおしどりに見立てているものもあり、小型のものは、祭祀遺跡からも出土します。形はとんでもないものに似ていますが、平瓶はやはり酒や水を入れて注ぐ容器のようです。

32　須恵器平瓶　平城京跡各地　奈良時代（８世紀）・陶器溲瓶　正暦寺旧境内　江戸時代（19 世紀前半）

陶磁器の世界

唐三彩と奈良三彩

33　奈良三彩陶器　平城京跡各地　奈良時代（８世紀）

34　唐三彩・白釉陶　平城京跡各地　中国　唐代（８世紀）

釉薬をかけた焼き物が陶器で、奈良時代に中国の唐三彩の技術をもとにつくられた奈良三彩は須恵器と土師器だけの古代の焼き物の世界に華やかな光沢と色彩をもたらしました。ただ、唐三彩に見られる型つくり技法、貼花文、練り上げの絞胎（こうたい）などは奈良三彩にはありません。また、唐三彩は副葬品や日常の高級陶器として流通した焼き物とみられますが、奈良三彩は、寺院、墳墓の他、平城京内では、井戸や地鎮めなどの祭祀遺構で見つかることが多く、必要に応じて官営工房で製作される権威を象徴する焼き物でした。

国際交易と焼き物

35　新羅土器　平城京跡各地
韓国　統一新羅時代（８世紀）

36　イスラム陶器　西大寺旧境内
イスラム帝国（アッバース朝・８世紀）

新羅土器（しらぎどき）は、韓国の統一新羅時代につくられた土器で、質は我が国の須恵器と変わりません。表面の印花文、線刻文が特徴的な硬質の土器です。イスラム陶器は、内外面に青緑色の厚い釉薬をかけた、軟質の陶器で、中東のイスラム帝国から、中国を経由して日本に持ち込まれたものとみられます。どちらも唐三彩とは違い、器そのものが輸入されたのではなく、薬品や香料など我が国では入手困難な産物の容器であったと考えられます。こうした８世紀の諸外国の焼き物の出土は平城京が８世紀の国際交易のネットワークに組み込まれていたことをよく示しています。

青と白へのあこがれ

三彩陶器は緑釉単彩化し、９世紀には緑釉だけを施した椀・皿類が増えていきます。また、白く焼き上がる良質の粘土に恵まれた東海地方の須恵器生産の中からは植物灰を釉薬として施す灰釉陶器（かいゆうとうき）が現れます。いずれも中国陶磁の形を模しているものが多く「青瓷（あおし）」と呼ばれた緑釉陶器は中国の青磁、「白瓷（しらし）」と呼ばれた灰釉陶器は中国の白磁を意識してつくられたと考えられています。

37　青磁・白磁碗　大安寺旧境内　中国　唐代（９世紀）

38　青磁・白磁碗　奈良市内各地
中国　宋～明代　（12 ～ 15 世紀）

39　緑釉陶器・灰釉陶器　奈良市内各地
平安時代前期（９～ 10 世紀）

唐物と国産

11 世紀後半以降、大量の中国陶磁が我が国にもたらされます。12 世紀中頃までは白磁が多く、鎌倉時代から室町時代には龍泉窯（りゅうせん）（浙江省）系の青磁が大量に輸入され、16 世紀の漳州窯（しょうしゅう）（福建省）系の青花磁器まで中国陶磁の輸入が続きます。国内では鎌倉時代に愛知県の瀬戸地方で釉薬をかけた陶器が復活し、中国陶磁の形を写した陶器が作られます。この技術が、17 世紀初頭に志野・織部といった高級陶器も生み出します。同じ頃に九州の肥前地方で朝鮮から技術を導入した陶器の生産が始まると、瀬戸・美濃の製品にかわり、西日本ではこの肥前陶器（唐津焼）が広く使われるようになります。

40　輸入磁器　中近世奈良遺跡各地
中国　明代　（16 ～ 17 世紀）

41　国産陶器（瀬戸・美濃・唐津）　中近世奈良遺跡各地
室町時代～江戸時代（15 世紀前半～ 17 世紀前半）

国産陶磁器の全国流通

磁器は白色の陶石を粉砕したものを材料にして1300度以上の高温で焼成した硬質で吸水性のない焼き物です。我が国では作り出すことができず、中国産の磁器は憧れの焼き物でした。江戸時代の17世紀初めに、朝鮮半島の技術をとりいれて、ようやく磁器が九州の肥前地方で誕生します。素焼きの素地に呉須（ごす）（コバルト）で絵付けし、透明釉をかけて本焼きしており、白い地肌の上に青い染付の美しさが引き立っています。肥前磁器は輸出品や献上品など優品に比重を置いた佐賀県の有田が有名ですが、「くらわんか茶碗」とも呼ばれる素朴な筆絵と厚手の国内向け日用雑器は長崎県の波佐見付近を中心に大量につくられました。江戸時代後期には日本全国に流通し、高級品だった磁器は一般庶民まで普通に使える器になります。焼き物が普段使いの食器として定着するのはこの肥前磁器の普及以後といってもよいでしょう。

奈良の焼き物である赤膚焼や兵庫県の三田青磁などは高級品で、江戸時代の奈良の食器は肥前磁器が主体でした。壺・甕・擂り鉢などの日常雑器のほとんどは信楽焼です。九州小倉の三官飴が入っていた上野（あがの）焼の壺、堺の焼き塩壺など諸国名産の容器も江戸時代の商品流通をよくものがたっています。

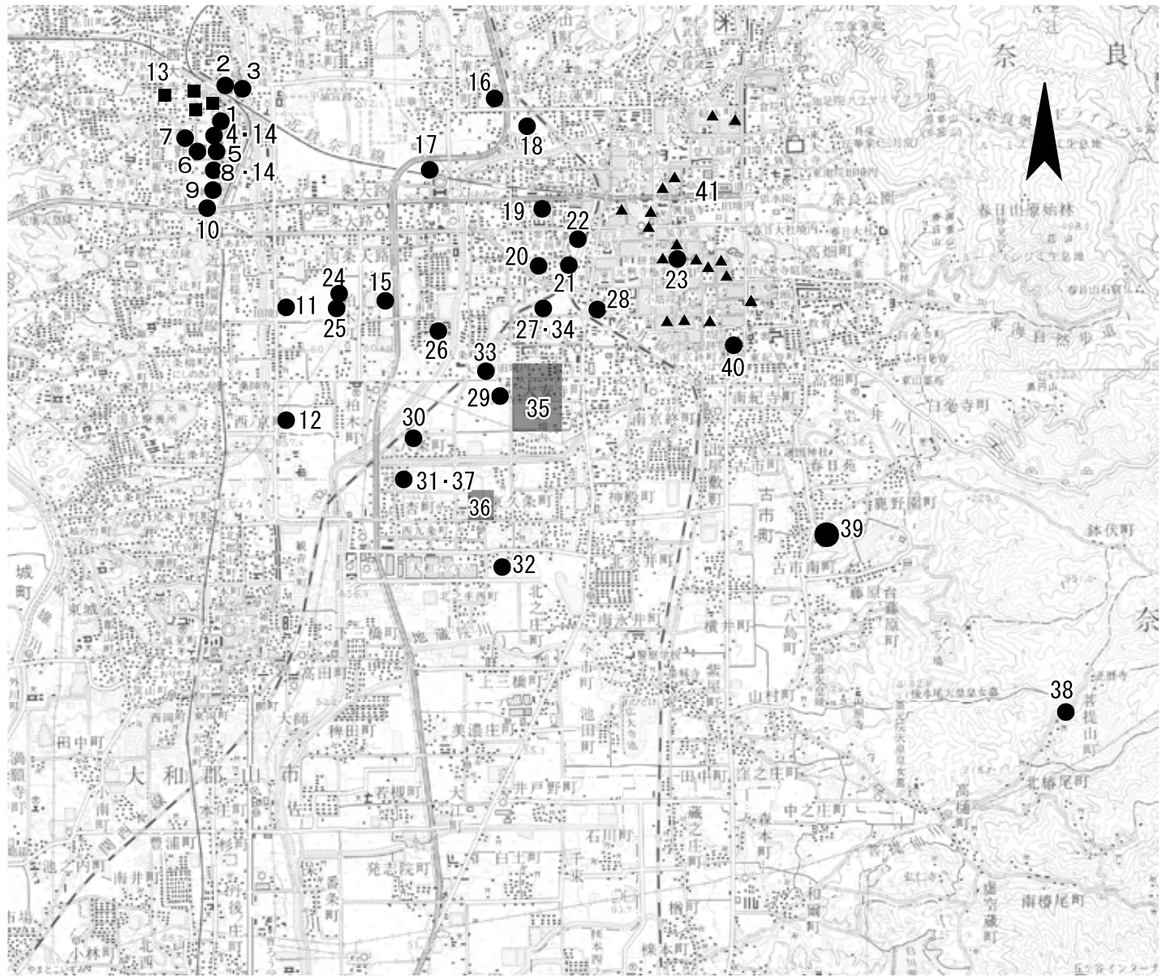
明かりの道具

焼き物は耐火性をもっているため、明かり、照明にも使われます。土師器皿は灯明皿として奈良時代以降、使い続けられますが、江戸時代後半にはより明るく、長時間持続し、使いやすくするために改良が進み、油皿の中央に灯心受けがあるひょうそく（たんころ）や吊り下げられるカンテラが出現します。蝋燭（ろうそく）は高価で、身分の高い人や裕福な人、特別な行事の時以外には使われなかったようで、燭台は高級品でした。

42　国産磁器（肥前・三田）　中近世奈良遺跡各地
江戸時代（17世紀後半～19世紀前半）

43　国産陶器（肥前・赤膚など）　中近世奈良遺跡各地
江戸時代（17世紀前半～19世紀前半）

44　明かりの道具　中近世奈良（高天町）遺跡
江戸時代（19世紀前半）



展示品の出土した主な遺跡（1）　1/50000

位置番号	遺跡名	写真番号	位置番号	遺跡名	写真番号
1	平城京右京一条南大路	34	22	平城京左京四条四坊十六坪	11
2	平城京右京一条二坊四坪	32	23	平城京左京四条六坊十四坪	15
3	平城京右京一条二坊十一坪	32	24	平城京左京五条一坊一・八坪	16
4	平城京右京二条三坊二・三坪	15、30、39	25	平城京左京五条一坊七坪	15
5	平城京右京二条三坊四坪	32、34	26	平城京左京五条二坊十四坪	15
6	平城京右京二条三坊五坪	30	27	平城京左京五条四坊十坪	35
7	平城京右京二条三坊六・十一坪	15、30	28	平城京左京五条五坊七坪	30、32
8	平城京右京三条三坊一坪	22	29	平城京左京六条三坊十三坪	17、39
9	平城京右京三条三坊二坪	17	30	平城京左京七条二坊六坪	16、34
10	平城京右京三条三坊三坪	15	31	平城京左京八条二坊一坪	32
11	平城京右京五条一坊十五坪	34	32	平城京九条三坊十一・十二坪	35
12	平城京右京七条一坊十五坪	7	33	平城京東堀河跡	11、32
13	西大寺旧境内（■）	11、17、18、23、30、36、38	34	大森遺跡	9
14	菅原東遺跡	3、17、18	35	大安寺旧境内	22、34、37、39
15	柏木遺跡	13	36	平城京東市跡	4、11、15、30、32、35
16	平城京左京一条三坊十三坪	18、39	37	杏遺跡	29、38
17	平城京左京二条二坊十二坪	15	38	正暦寺旧境内	31、32
18	平城京左京二条四坊七坪	22	39	古市城跡・古市城山遺跡	10、38
19	平城京左京三条四坊十一坪	34	40	東紀寺遺跡	14、29
20	平城京左京四条四坊五坪	11	41	中近世奈良遺跡（▲）	5～7、12、17、18、20
21	平城京左京四条四坊十四坪	16			21、24～28、31、38～44

展示品の出土した主な遺跡（２） 1/50000

位置番号	遺跡名	写真番号
42	杣ノ川イモタ遺跡	1
43	ゼニヤクボ遺跡	２、８、13

展示品目録

番号	展示品名	遺跡名	所在地	年代	点数
調理の器					
1	縄文土器深鉢	杣ノ川イモタ遺跡	杣ノ川町	縄文時代早期	1
2	弥生土器甕	ゼニヤクボ遺跡	都祁蔵生町ほか	紀元前２～前１世紀	1
3	土師器甕	菅原東遺跡	菅原町	４世紀	1
4	土師器甕	平城京東市跡	東九条町	８世紀	1
5－1	土師器羽釜	中近世奈良遺跡	椿井町	12 世紀前半	1
5－2	土師器羽釜	中近世奈良遺跡	北室町	17 世紀半ば	1
6－1	土師器炮烙	中近世奈良遺跡	西笹鉾町	17 世紀後半	1
6－2	行平鍋	中近世奈良遺跡	高天町	19 世紀前半	1
6－3	土鍋	中近世奈良遺跡	高天町・林小路町	19 世紀前半	2
7－1	須恵器鉢	平城京右京七条一坊十五坪	六条町	11 世紀後半	1
7－2	瓦質土器擂り鉢	中近世奈良遺跡	北室町	17 世紀初	1
7－3	陶器鉢・片口鉢	中近世奈良遺跡	高天町・林小路町	19 世紀前半	2
7－4	信楽産擂り鉢	中近世奈良遺跡	北室町	17 世紀初	1
7－5	堺産擂り鉢	中近世奈良遺跡	高天町	19 世紀半ば	1
たくわえの器					
8	弥生土器壺	ゼニヤクボ遺跡	都祁蔵生町ほか	紀元前２～前１世紀	1
9	弥生土器壺	大森遺跡	大森町	１～２世紀	9
10	須恵器甕	古市城山遺跡	古市町	５～６世紀	1
11	須恵器甕	平城京左京四条四坊五坪	三条大宮町	８世紀	1
	須恵器横瓶	西大寺旧境内	西大寺南町	８世紀	1
	須恵器四耳壺	平城京左京四条四坊十六坪	三条本町	８世紀	1
	須恵器三耳壺	平城京東堀河	大安寺町	８世紀	1
	須恵器短頸壺・蓋	平城京東市跡	東九条町	８世紀	2
12	備前焼甕	中近世奈良遺跡	椿井町	16 世紀	1
食事の器					
13	弥生土器鉢・高杯	柏木遺跡・ゼニヤクボ遺跡	柏木町・都祁蔵生町ほか	紀元前２～前１世紀	2
14	須恵器蓋杯	東紀寺遺跡	紀寺町	５世紀	8
15 貴族の食膳	土師器杯	平城京右京三条三坊三坪	菅原東町	８世紀	1
	土師器皿 大	平城京左京五条二坊十四坪	大安寺町	８世紀	1
	小	平城京右京二条三坊三坪	菅原町	８世紀	1
	土師器椀	平城京右京二条三坊十一坪	菅原町	８世紀	1
	土師器高杯	平城京東市跡	東九条町	８世紀	1
	須恵器杯	平城京左京二条二坊十二坪	法華寺町	８世紀	1
庶民の食膳	土師器杯	平城京左京五条一坊七坪	柏木町	８世紀	1
	土師器皿	平城京左京四条六坊十四坪	脇戸町・東城戸町	８世紀	1
	須恵器杯	平城京左京二条二坊十二坪	法華寺町	８世紀	1
16 須恵器	杯・蓋 大	平城京左京四条四坊十四坪	三条大宮町	８世紀	2
	杯・蓋 中	平城京左京七条二坊六坪	八条町	８世紀	2
	杯 小	平城京左京七条二坊六坪	八条町	８世紀	1
	蓋 小	平城京左京五条一坊一・八坪	柏木町	８世紀	1

17-1	土師器杯	平城京右京三条三坊二坪	菅原町	8 世紀	1
17-2	黒色土器Ａ類杯	西大寺旧境内	西大寺南町	10 世紀半ば～後半	2
17-3	黒色土器Ａ類椀	菅原東遺跡	菅原町	11 世紀	2
17-4	黒色土器Ｂ類椀	平城京左京六条三坊十三坪	大安寺町	11 世紀	2
17-5	瓦器椀	中近世奈良遺跡	上三条町	11 世紀末	2
17-6	瓦器椀	中近世奈良遺跡	椿井町	12 世紀前半	2
17-7	瓦器椀	中近世奈良遺跡	脇戸町・東城戸町・十輪院町	13 ～ 14 世紀	4
18-1	土師器杯・皿	平城京左京一条三坊十三坪	法華寺町	9 世紀半ば～後半	4
18-2	土師器杯・皿	西大寺旧境内	西大寺南町	10 世紀半ば～後半	4
18-3	土師器皿	菅原東遺跡	菅原町	11 世紀	5
18-4	土師器皿	中近世奈良遺跡	上三条町	11 世紀末	5
18-5	土師器皿	中近世奈良遺跡	椿井町	12 世紀前半	5
18-6	土師器皿	中近世奈良遺跡	脇戸町・東城戸町	13 世紀	5
18-7	土師器皿	中近世奈良遺跡	十輪院町・紀寺町	14 世紀	5
18-8	土師器皿	中近世奈良遺跡	北室町	15 世紀	5
18-9	土師器皿	中近世奈良遺跡	北室町	16 世紀	5
18-10	土師器皿	中近世奈良遺跡	林小路町	17 世紀	5
18-11	土師器皿	中近世奈良遺跡	高天町	17 世紀末～ 18 世紀	5
18-12	土師器皿	中近世奈良遺跡	高天町	19 世紀	5
19	ミニチュア土器	平城京跡各地	奈良市内各地	8 世紀	38
20	神酒徳利	中近世奈良遺跡	高天町・林小路町	19 世紀	2
	仏飯器	中近世奈良遺跡	高天町・井上町・林小路町	19 世紀前半	6
	華瓶・香炉	中近世奈良遺跡	高天町	19 世紀前半	4
	線香筒	中近世奈良遺跡	高天町	19 世紀前半	2
	瓦質土器　華瓶・香炉	中近世奈良遺跡	北室町	17 世紀初	2
21	ごんぱい（後２列）	中近世奈良遺跡	北室町	14 世紀末～ 15 世紀初	8
	（前２列）	中近世奈良遺跡	高天町	19 世紀前半	8

茶の器

22	緑釉陶器　羽釜	大安寺旧境内	大安寺町	8 世紀末～ 9 世紀初	1
		平城京右京三条三坊一坪	菅原町	8 世紀末～ 9 世紀初	1
	緑釉陶器　椀	大安寺旧境内	大安寺町	8 世紀末～ 9 世紀初	1
		平城京左京二条四坊七坪	法蓮町	8 世紀末～ 9 世紀初	1
23	輸入磁器　天目碗（建窯）	西大寺旧境内	西大寺南町	13 世紀	2
24	天目碗　瀬戸	中近世奈良遺跡	北室町・林小路町	17 世紀前半	2
	天目碗　肥前陶器	中近世奈良遺跡	北室町	17 世紀前半	1
	天目碗　肥前磁器	中近世奈良遺跡	椿井町	17 世紀前半	1
	茶碗　肥前陶器	中近世奈良遺跡	北室町・西笹鉾町	17 世紀前半～ 18 世紀	2
25	急須	中近世奈良遺跡	高天町	19 世紀前半	2
	煎茶碗	中近世奈良遺跡	高天町	19 世紀前半	4
26	土瓶	中近世奈良遺跡	高天町・中筋町	19 世紀前半	4
	湯飲み碗	中近世奈良遺跡	高天町・西木辻町・瓦堂町	19 世紀前半	10
27	茶壺	中近世奈良遺跡	高天町	19 世紀前半	6
28	瓦質風炉	中近世奈良遺跡	阿字万字町	15 世紀前半	1
	土風炉	中近世奈良遺跡	阿字万字町	18 世紀前半	1

酒の器

29	須恵器　甕	東紀寺遺跡	紀寺町	5 世紀	1
	須恵器　鈴付壺	杏遺跡	杏町	6 世紀	1
30	須恵器広口甕	平城京左京五条五坊七坪	西木辻町	8 世紀	1
	須恵器長頸壺　大	西大寺旧境内	西大寺南町	8 世紀	1
		平城京右京二条三坊六・十一坪	菅原町	8 世紀	1
	小	平城京右京二条三坊二・三坪	青野町	8 世紀	1
		平城京東市跡	東九条町・杏町	8 世紀・9 世紀後半	3
	須恵器注口土器　大	平城京右京二条三坊二・三坪	青野町	8 世紀	1
	小	平城京右京二条三坊五坪	菅原町	8 世紀	1
31	備前焼徳利	中近世奈良遺跡	北室町	19 世紀前半	1
	陶器徳利	中近世奈良遺跡	林小路町	19 世紀前半	1
	磁器徳利	中近世奈良遺跡	今小路町	18 世紀前半	1
		正暦寺旧境内	菩提山町	19 世紀前半	1
	きくや酒瓶	中近世奈良遺跡	高天町	19 世紀後半～ 20 世紀初	2
	あられ酒陶器瓶・ガラス瓶	中近世奈良遺跡	高天町	19 世紀後半～ 20 世紀初	5
	同上　猪口・酒杯・片口鉢	中近世奈良遺跡	高天町	19 世紀後半～ 20 世紀初	4
	酒杯	中近世奈良遺跡	中新屋町	17 世紀前半	1
		中近世奈良遺跡	高天町・西木辻町	19 世紀前半	2
	猪口	中近世奈良遺跡	瓦堂町	19 世紀前半	1
32	須恵器平瓶　大	平城京右京一条二坊十一坪	西大寺栄町	8 世紀	1
	中	平城京東市跡	東九条町	8 世紀	1
		平城京右京一条二坊四坪	西大寺栄町	8 世紀	1
	小	平城京東堀河	大安寺町	8 世紀	1
		平城京左京五条五坊七坪	西木辻町	8 世紀	1
		平城京左京八条二坊一坪	杏町	8 世紀	1
	須恵器鳥鈕蓋	平城京右京二条三坊四坪	菅原町	8 世紀末	1
	陶器溲瓶	正暦寺旧境内	菩提山町	19 世紀前半	1

陶磁器の世界

33	奈良三彩陶器	大安寺旧境内ほか	大安寺町ほか	8 世紀	31
34	唐三彩　輪花杯	平城京左京七条二坊六坪	八条町	8 世紀	1
	杯	平城京右京五条一坊十五坪	五条町	8 世紀	2
	陶枕	大安寺旧境内	大安寺二丁目	8 世紀	3
		平城京右京二条三坊四坪	菅原町	8 世紀	1
	三足炉	平城京右京一条南大路	西大寺南町	8 世紀	1
	唐白釉　円面獣脚硯	平城京左京三条四坊十一坪	大宮町二丁目	8 世紀	1
35	新羅土器　壺	平城京東市跡	東九条町	8 世紀	1
		平城京左京九条三坊十一・十二坪	東九条町	8 世紀	1
		平城京左京五条四坊十坪	大森町	8 世紀	1
36	イスラム陶器	西大寺旧境内	西大寺新田町	8 世紀	一括
37	白磁碗・青磁碗	大安寺旧境内	大安寺町	9 世紀	3
38	青磁碗（龍泉窯系）	西大寺旧境内	西大寺南町	12 世紀後半	2
		古市城跡	古市町	13 世紀前半	1

38	青磁碗（龍泉窯系）		中近世奈良遺跡	北室町	15 世紀	1
	白磁碗		杏遺跡	杏町	12 世紀半ば	1
39	緑釉陶器	椀	平城京左京一条三坊十三坪	法華寺町	9 世紀半ば～後半	1
			大安寺旧境内	大安寺町・大安寺一丁目	9 世紀半ば～ 10 世紀初	3
		皿	大安寺旧境内	大安寺四丁目	9 世紀半ば～後半	1
	灰釉陶器	椀	平城京右京二条三坊二坪	青野町	10 世紀前半	1
			平城京左京六条三坊十三坪	大安寺町	10 世紀前半	1
	灰釉陶器	皿	中近世奈良遺跡	脇戸町・東城戸町	9 世紀後半	1
			大安寺旧境内	大安寺町	9 世紀後半	1
		段皿	大安寺旧境内	大安寺町	9 世紀後半	1
40	青花　碗		中近世奈良遺跡	阿字万字町・北室町	16 ～ 17 世紀	3
	皿		中近世奈良遺跡	北室町・中新屋町・椿井町	16 ～ 17 世紀	4
	鉢		中近世奈良遺跡	椿井町・高天町	16 ～ 17 世紀	2
	白磁　皿		中近世奈良遺跡	椿井町	16 ～ 17 世紀	1
41	肥前唐津	鉄絵皿	中近世奈良遺跡	西之阪町・鵲町・北室町		
				勝南院町・阿字万字町	17 世紀前半	6
		皿	中近世奈良遺跡	北室町	17 世紀前半	2
	瀬戸･美濃	皿	中近世奈良遺跡	北室町	17 世紀前半	5
		平碗	中近世奈良遺跡	阿字万字町	15 世紀前半	1
	美濃織部	向付	中近世奈良遺跡	阿字万字町	17 世紀前半	1
	美濃志野	向付	中近世奈良遺跡	北室町・高天町	17 世紀前半	2
42	肥前磁器	飯茶碗	中近世奈良遺跡	高天町・井上町・北室町	17 世紀後半	
				林小路町	～ 19 世紀前半	12
		皿	中近世奈良遺跡	井上町・椿井町・今小路町	18 世紀	7
		鉢	中近世奈良遺跡	椿井町・高天町・林小路町	17 世紀後半	
					～ 19 世紀前半	5
	三田青磁	鉢	中近世奈良遺跡	高天町	19 世紀前半	1
		皿	中近世奈良遺跡	瓦堂町	19 世紀前半	1
43	肥前陶器	皿	中近世奈良遺跡	井上町	18 世紀後半	2
	京焼碗		中近世奈良遺跡	西笹鉾町	18 世紀前半	1
	赤膚焼	小鉢	中近世奈良遺跡	高天町	19 世紀前半	3
	上野焼飴壺		中近世奈良遺跡	高天町	19 世紀前半	1
	焼き塩壺		中近世奈良遺跡	高畑町・阿字万字町	17 世紀前半	
				脇戸町・東城戸町・北室町	～ 18 世紀後半	6
44-1	灯明受け	脚付	中近世奈良遺跡	高天町	19 世紀前半	3
		皿形	中近世奈良遺跡	高天町	19 世紀前半	9
	灯明皿		中近世奈良遺跡	高天町	19 世紀前半	7
	芯押さえ		中近世奈良遺跡	高天町	19 世紀前半	1
44-2	ひょうそく		中近世奈良遺跡	高天町	19 世紀前半	1
44-3	カンテラ		中近世奈良遺跡	高天町	19 世紀前半	2
44-4	燭台		中近世奈良遺跡	高天町	19 世紀前半	2

平城遷都１３００年祭記念
平成 21 年度　秋季特別展（第 27 回平城京展）
出土品に見る　奈良のやきものと暮らし

平成 21 年 11 月 2 日発行

編集　奈良市埋蔵文化財調査センター

発行　奈良市教育委員会

この冊子は 3000 部作製し、1 部あたりの印刷経費は 78. 5 円です。